

動詞 *pouvoir* の基本的な働き

曾 我 祐 典

0．はじめに

フランス語の動詞 *pouvoir* については、(01) のような発話¹⁾ の多義性がよく論じられてきたが²⁾、代名詞 *se* を添える (02)、(03) のような用法の細部まで視野に収めた論考はないようだ。

(01) Clarisse peut venir demain.

(02) Ça se peut.

(03) Il se peut que Clarisse vienne demain.

言語実態の観察とインフォーマントの面接調査にもとづいて³⁾、*se* を添える場合を含むすべての用法を説明しうる *pouvoir* の機能を探るのが本稿の目的である。

以下では、まず、主要な用法を概観して *pouvoir* の基本的な働きについて仮説を提案する(1)。そして、その仮説にもとづいて、各用法の発話を構成する際に発話者が行う操作がどのようなものであるか考える(2)。

1．用法の概観と基本的な働き

1.1．用法の概観

発話例の観察とフランス語辞書 (GR, TLF など) の記述からは、*pouvoir* に次の3つの主要な用法を認めることができる。それらを順に見ていこう。

1. 1. 1. 用法 1: A = pouvoir [Inf]

主体 A に「事行 Inf をすることが可能である、できる」という述部付与をする場合で、pouvoir を A pouvoir Inf の構文で用いる⁽⁴⁾。従来の多くの研究が根源的な用法と見なして“pouvoir radical”と呼んでいるものである。

(04) Clarisse peut faire ça en une demi-heure.

1. 1. 2. 用法 2: pouvoir [A Inf]

事態 A Inf について「可能性がある、ありうる」ということを表す場合で、用法 1 の場合と同じく、pouvoir を A pouvoir Inf の構文で用いる。従来の多くの研究が認識的モダリティを表すとして“pouvoir épistémique”と呼んでいる用法である。

(05 = 01) Clarisse peut venir demain.

1. 1. 3. 用法 3: se pouvoir [ça/cela][il-que A Sub]

これも認識的モダリティを表す用法だが、従来の研究はほとんど論じていない。次の 2 つの場合を区別することができる。

用法 3 A: se pouvoir [ça/cela]

事態 ça/cela について「可能性がある、ありうる」ということを表す場合で、pouvoir に代名詞 se を添えて ça/cela se pouvoir の構文で用いる。

(06 = 02) Ça se peut.

用法 3 B: se pouvoir [il-que A Sub]

事態 que A Sub について「可能性がある、ありうる」ということを表す場合で、pouvoir に代名詞 se を添えて il se pouvoir que A Sub の非人称構文で用いる。

(07 = 03) Il se peut que Clarisse vienne demain.

1. 2. 基本的な働きについての仮説

ここでは、用法 1-3 のすべてを支えているはずの pouvoir の基本的な働き

がどのようなものであるか考える。

1. 2. 1. これまでの研究の多くは、主体 A に「事行 Inf が可能である、できる」という述部付与をする用法 1 (A = *pouvoir* [Inf]) を根源的 “radical” と見なしている。それによれば、*pouvoir* の働きは次のように表せるだろう。

(08) *pouvoir* は「(事行が) 可能である、できる」を表す。

この見方にもとづいて用法 2, 3 をうまく説明することはできるだろうか。用法 2 は、用法 1 を踏まえて、「A にとって事行 Inf が可能である、できる」なら事態 A Inf が「可能性がある、ありうる」ことになる、という論法で説明できるだろう。しかし、用法 3 は、用法 2 の場合と同様の論法を試みようとしても、代名詞 *se* をなぜ添えるか説明できないという障害にぶつかってしまう⁽⁵⁾。

そこで、用法 2 (*pouvoir* [A Inf]) を基本と考えることにすると、*pouvoir* の働きは次のようなものであることになるだろう。

(09) *pouvoir* は「(事態が) 可能性はある」を表す。

この考え方にもとづくと、用法 1 は、用法 2 を踏まえて、「事態 A Inf が可能性はある」なら A にとって「事行 Inf が可能である、できる」ことになる、という論法で説明できるだろう。しかし、用法 3 については、やはり代名詞 *se* の使用が説明できないという障害にぶつかってしまう。

だからといって、*se* を添える用法 3 (*se pouvoir* [ça/cela]/[il-que A Sub]) をもっとも基本的な用法と見なすことには無理がある。

1. 2. 2. 次の (10) のように、*pouvoir* が他動性をもつ場合もあると考えれば、用法 3 の *se* の使用が説明できるのは確かである。

(10) *pouvoir* は、「(事行・事態が) 可能性はある」または「(事行・事態が) 可能性のあるようにしている」を表す。

しかし、このように他動性をもたない場合ともつ場合を想定するのではなく、やはり 3 用法を支える単一の働きを探るべきであろう。そこで考えられ

るのは次のようなものである。

(11) *pouvoir* は「(X が事行・事態を) 可能性があるようにしている」を表す。

ただし, X が何であるかは場合によってさまざまである。また, 用法 2 では発話者は X を表す語句を文主語としない。次の章では, この(11)の仮説を採る場合に各用法の発話構成操作がどのようなものであると考えられるかや詳しく検討する。

2. 各用法における発話構成操作

2. 1 . 用法 1: A *pouvoir* Inf

用法 1 の場合, (11) の仮説により *pouvoir* は「(X が事行を) 可能性があるようにしている」を表すのだから, 事行主体 A に注目すると「(X によって) A は事行 Inf をすることが可能である, できる」ということになる。このようにして, A に「事行 Inf をすることが可能である, できる」という述部付与をする場合に A *pouvoir* Inf の構文を用いることが説明できる。図式的に示せば次のようになるだろう(矢印は「可能性があるようにしている」という働きかけを, “possible” は「可能である, できる」を示す)。

X [Inf] > A = [Inf possible]

X は, A に内在する要因(能力・適性など)のこともあれば A の外の要因(物理的条件・事情・許可など)のこともある。

次の(12)は, X が A に内在する要因(能力・適性など)であることが文脈から示されている例である。

(12) *Complètement remise de sa maladie, elle peut partir en week-end.*

X が A に内在する要因である場合, 発話者は X と A を同一視すると考えれば, X を表す語句を文主語にしていることになる。

X が A の外の要因である場合は, X を表す語句を文主語にすることはない。

(13) *La circulation est fluide ; on pourra arriver avant midi.*

(14) Ses parents étaient d'accord ; elle pouvait y aller.

(11) の仮説は、*pouvoir* が表す事行を「可能性があるようにしている」という他動的なものと想定している。(15) のように *pouvoir* が直接目的語と見なせる代名詞・不定代名詞など特定の語句を伴うことがあるが⁽⁶⁾、この事実は(11)の仮説を間接的に支持するものである。

(15) Se servir de ça? Ils *le* peuvent. (*Tout*) *ce* qu'on peut. / Pouvez-vous *quelque chose*? / Elles peuvent *beaucoup*. / Cet homme peut *tout*. / *Que* pouvez-vous pour nous? / Je n'y peux *rien*.

2. 2 . 用法 2 : A pouvoir Inf

用法 2 については、2 つの説明が考えられる。ひとつは、用法 1 を踏まえるもので、(11) の仮説により「A は事行 Inf をすることが可能である、できる」のだから事態 A Inf は「可能性がある、ありうる」ことになる、という説明である。

もうひとつは、(11) の仮説により「X が事態 A Inf を可能性のあるようにしている」ということから「X によって事態 A Inf が可能性がある、ありうる」ということになるとする説明である。図式的に示せば次のようになるだろう(矢印は「可能性があるようにしている」という働きかけを、“*possible*” は「可能性がある、ありうる」を示す)。

X A Inf > A Inf *possible*

用法 2 の場合に X を主語として表示することがないのは、それが「なんらかの事情」とでも言うほかない、きわめて抽象的で漠然としたものであるためだと考えられる⁽⁷⁾。

事態 + 認知的モダリティ は(16 b),(17 b)のように *que* A Sub に *il être* 形容詞 その他を添える複文形式で表すことが多いために、(16 a),(17 a) のような単文形式 A pouvoir Inf は特異なものに見えるかもしれないが、事態の認知的モダリティを「事態の主要な要素である A」を介して表

す (A に「事態が可能性がある」ための条件を託す) メトニミー的な発話構成操作によるものと考えることができる⁽⁸⁾。

(16) a. Le patron pouvait le rappeler à tout moment.

b. Il était possible que le patron le rappelle à tout moment.

(17) a. Elle peut en être responsable.

b. Il est possible qu'elle en soit responsable.

事態 il Inf (il は非人称) について「可能性がある, ありうる」ということを il pouvoir Inf で表す表現法は, ヴァリエーションと見なすことができる⁽⁹⁾。

(18) Il peut y avoir une erreur.

(19) Dans cette région, il peut neiger même en avril.

用法 2 は A pouvoir Inf の形式である点で用法 1 と同じだが, コミュニケーション場面・文脈から切り離れた (05), (16 a) のような発話をインフォーマントに示すと, 用法 1 の解釈に傾きがちである。これは, ひとつには A pouvoir Inf の場合, 用法 1 の方が「根源的」であることによると考えられ, また, (17) のように事行タイプが「状態」の場合や (18), (19) のように非人称の il が主語の場合は別として, 一般に用法 1 の方がはるかに頻度が高いことによると考えられる。もちろん, 次の (20) のように適切な文脈を与えられると, 用法 2 の解釈が自然になる。

(20) Le pavé était glissant et l'enfant pouvait tomber d'un instant à l'autre.

用法 1 との差異としては, 用法 2 の場合, A pouvoir Inf における Inf を代名詞 le で受けることができないということが指摘できる。

(21) a. L'enfant pouvait tomber d'un instant à l'autre.

b.* L'enfant le pouvait d'un instant à l'autre.

用法 2 においては事態 l'enfant tomber の認知的モダリティのマーカー

として *pouvoir* を用いるのだから、事行 *tomber* のみを *le* で受けて *pouvoir* の目的語とする表現形式は適合しないと感じられるためであろう。

また、GUIMIER C. (1989) は、“(…) *pouvoir* épistémique ne peut en aucune façon être sous la portée de la négation” としているが (p. 11), これは誤りであろう。発話者が、用法 2 の否定文発話として次のようなものを構成することは珍しくない。

(22) *Cela ne peut pas être vrai.*

(23) *Il ne peut pas y avoir de progrès social sans progrès économique.*

2. 3 . 用法 3 : A. *ça/cela se pouvoir* B. *il se pouvoir que A Sub*

2. 3. 1 . 用法 3 A : *ça/cela se pouvoir*

(11) の仮説は *pouvoir* が「(X が事行・事態を) 可能性があるようにしている」を表すというものだが、用法 3 A においては、発話者は事態そのものが「自らを可能性があるようにしている」, 「おのずから可能性があるようになっている」(X は事態にほかならない) ところから「可能性がある, ありうる」ととらえていて、事態を文主語 *ça/cela* (リラックスした場面ではたいてい *ça*) で表示し、*pouvoir* に代名詞 *se* を添える発話を構成すると考えることができる⁽¹⁰⁾。図式的に示せば次のようになるだろう (矢印は「可能性があるようにしている」という働きかけを, “*possible*” は「可能性がある, ありうる」を示す)。

$X([\text{ça/cela}]) \rightarrow \text{ça/cela possible}$

発話者が *ça/cela* により喚起しようとする事態が何であるかは、先行文脈から分かるのがふつうである。用法 3 A の発話を構成するのは対話においてであることが多く、BOISSEL et al. (1989) が指摘するとおり (p. 52), (24) のような質問に対する回答だけでなく, (25), (26) のような発言も見られる。

(24) *Tu as dû l'oublier au café?*

Oui, ça se peut.

(25) J'ai entendu dire que Pierre est en vacances.

Ça se pourrait bien.

(26) Que Dieu leur pardonne!

Si ça se peut.

que A Sub に ça/cela se pouvoir を続ける構文もインフォーマントは容認する。

(27) Que Louis se soit trompé de train, ça se peut.

(28) Que le cadeau ne lui ait pas plu, ça se peut.

われわれの調査で観察された発話はほとんどが現在形または条件法現在形で、わずかに半過去形も見られる。インフォーマントによれば、半過去形の発話の容認度の判定にはやや困難が伴うようだ。

(29) A cette époque, ça se pouvait bien.

未来形の発話例はわれわれのコーパスには見られないが、インフォーマントは、話が未来のある時期のことにおよんでいる文脈を想定すれば、容認する。

(30) A ce moment-là, ça se pourra.

インフォーマントによれば、未来形の発話の容認度の判定にはかなり困難が伴うようだ。それは、発話者が発話時点における操作である「認識的モダリティの付与」を行うのは現在形・条件法現在形によることが多く、先行文脈による事態 ça/cela の過去時・未来時への位置づけ（発話時点からの切り離し）が十分な場合にカギって半過去形・未来形により行いうるためであろう。また、現代フランス語でも文体によっては se pouvoir を pouvoir se faire（用法1）の意味で用いることがあるために、(29)、(30) のような発話を判定するときに “ça pouvait se faire”, “ça pourra se faire”（用法1）という解釈が想起され、それが邪魔になるというようなこともあろう⁽¹¹⁾。

2. 3. 2 . ça/cela se pouvoir + que A Sub

辞書・文法書・研究文献は指摘していないようだが、ça/cela se pouvoir

に *que A Sub* や *qu'il Sub* (*il* は非人称) を添える発話が珍しくないことは、われわれの調査ではっきり確かめられた。

(31) *J'ai téléphoné plusieurs fois chez lui. Mais ça ne répond pas.*

Ça se pourrait bien qu'il soit toujours en vacances.

(32) *Ça se pourrait qu'il fasse beau demain.*

(33) *A ce moment-là, ça se pourra qu'elle vienne nous rejoindre.*

これは、*ça/cela se pouvoir* の発話を構成しておいて、それに事態 *ça/cela* の内容を *que A Sub* または *qu'il Sub* で言い添える表現法である。このような発話構成操作であることがはっきり分かるのが、*que A Sub* または *qu'il Sub* の前に明確な休止をおく次のような発話の場合である。

(34) *Ça se peut, qu'elle prenne l'avion demain.*

2. 3. 3. 用法 3 B: *il se pouvoir que A Sub*

用法 3 B においては、発話者は、事態 + 認識的モダリティ を表すために非人称構文 *il se pouvoir que A Sub* の発話を構成する。(11) の仮説によれば *pouvoir* は「(X が事行・事態を) 可能性があるようにしている」を表すわけだが、用法 3 A と同様に、発話者は事態そのものが「自らを可能性があるようにしている」、「おのずから可能性があるようになっている」(X は事態にほかならない) ところから「可能性がある、ありうる」ととらえていると考えることができる。発話者は事態を表す *que A Sub* を非人称の *il* と組み合わせて実質的な文主語として表示し⁽¹²⁾、*pouvoir* に代名詞 *se* を添えて発話を構成する⁽¹⁰⁾。図式的に示せば次のようになるだろう(矢印は「可能性があるようにしている」という働きかけを、“*possible*” は「可能性がある、ありうる」を示す)。

$X (= [il\text{-}que A Sub]) \rightarrow il\text{-}que A Sub \text{ possible}$

用法 3 B は、あらたまった言葉づかいの場合に限られる。

(35) *Il se peut que Clarisse parte.*

(36) *Il se pourrait que vous rencontriez un obstacle inattendu.*

(37) Il se pouvait que la tempête couve.

事態 *qu'il Sub* (*il* は非人称) について「可能性がある, ありうる」ということを *il se pouvoir qu'il Sub* で表す表現法は, この用法 3 B のヴァリエーションと見なすことができる。

(38) Il se peut qu'il y ait une guerre.

(39) Il se peut qu'il reste encore quelques pages à rédiger.

われわれの調査では, 観察される発話はほとんどが現在形または条件法現在形で, わずかに半過去形・未来形も見られる。

(40) Il se pouvait qu'il pleuve.

(41) Il se pourra qu'il pleuve.

3. おわりに

本稿では, 動詞 *pouvoir* の基本的な働きとして, 次のような仮説を提案した:

(11) *pouvoir* は「(X が事行・事態を) 可能性のあるようにしている」を表す。

そして, この仮説にもとづいて, 各用法について発話構成操作がどのようなものであるか考えた。それらは次のように図式的に示すことができる(矢印は「可能性のあるようにしている」という働きかけを, “*possible*” は「可能である, できる; 可能性のある, ありうる」を示す)。

用法 1: $X \text{ [Inf]} > A = [\text{Inf possible}]$

用法 2: $X \quad A \text{ Inf} > A \text{ Inf possible}$

用法 3: $X(= [\text{ça/cela}]) X > \text{ça/cela possible}$

$X(= [\text{il-que A Sub}]) X > \text{il-que A Sub possible}$

X が何であるかは場合によってさまざまである。用法 2 の場合, 発話者は X を表す語句を文主語としない。用法 3 A, 3 B の場合の X については, 「発

話者のとらえ方」という認知行為レベルの要因と見なす、かなり異なる考え方をすることもできる。これに関しては、別の機会に検討することにした。 *pouvoir* の時称、Inf が表す事行のタイプなどについても十分な検討を加えることができなかった。やはり今後の課題としたい。

注

- (1) 以下に示す発話例のうち出典を記していないものは、インフォーマントの協力を得てわれわれが作成したものである。
- (2) *Langue Française* N°84 (1989) と LE QUERLER (1996) の参考文献参照。
- (3) おもに西村牧夫氏 (西南学院大学) と中尾浩氏 (愛知大学) に提供していただいたデータと *Le Monde* 1998-1999 (CD-ROM) を利用した。また、インフォーマントは高学歴のフランス人5人で、とくに Jean-Paul HONORÉ 氏 (Univ. Marne-la-Vallée) と Alain THOTE 氏 (CNRS) には長時間の面接調査に応じていただいた。
- (4) “Inf” は、動詞 (不定法) とその補語から成る語群を示すものとする。
- (5) *se pouvoir* を *se pouvoir faire* (*pouvoir se faire* の古い形) の *faire* が脱落したものとも見なさないかぎり、説明できそうにない。しかし、そのような見方は、“Ça se peut.”, “Ça se pourrait bien.” などを使う (用法3A) のがもっぱらリラックスした場面であることから、やはり無理があると言わざるをえない。
- (6) (15) のような発話の場合、*pouvoir* がしばしば *pouvoir Inf* (Inf は場面・文脈から明らかでしばしば *faire*) に相当すると考えるなら特定の語句の多くは Inf の目的語ということになるが、われわれはそのような考え方を採らない。
- (7) X が「発話者のとらえ方」であるためだとする考え方もできよう。この場合は、X を事行・事態のレベルの要因ではなく、発話者の認知行為のレベルの要因と見ることになる。
- (8) 同様の発話構成操作は、*sembler* (*Il semble que A Sub / A semble Inf*) や英語の *be likely* (*It is likely that A Ind / A is likely to Inf*) などの場合についても想定できる。
- (9) *il arriver que A Sub* や *il se faire que A Ind* のような非人称表現は、用法2の *pouvoir* を用いる場合にはそれぞれ *il pouvoir arriver que A Sub*, *il pouvoir se faire que A Sub* のような形になる。これらを用法3Bの *il se pouvoir que A Sub* の構文と混同してはならない。
- (10) X を「発話者のとらえ方」という認知行為のレベルの要因と見ることもできよう。この考え方について本稿では論じる余裕がないが、いずれの考え方を採るに

せよ, 発話者が事態そのもののあり方に目を向けている点は共通している。

- (11) 同じことが次のような発話についても考えられる: *Ce qu'on veut ne se peut pas toujours. / Ce qui n'est pas interdit se peut par définition.*
- (12) *que A Sub se pouvoir* の形式の発話を構成することはない: **Qu'elle parte se peut.*

参考文献

- BOISSEL, P. et al. (1989): "Paramètres énonciatifs et interprétations de *pouvoir*", *Langue Française* 84, pp. 24–69.
- GUIMIER, C. (1989): "Constructions syntaxiques et interprétations de *pouvoir*", *Langue Française* 84, pp. 9–23.
- 林 迪義 (1998): 「POUVOIR のモダリティについて」, 『フランス語を考える - フランス語学の諸問題 II』, 三修社, pp. 45–57.
- LE GOFFIC, P. (1993): *Grammaire de la phrase française*, Hachette.
- LE QUERLER, N. (1996): *Typologie des modalités*, Presses Universitaires de Caen.
- 曾我祐典 (1997): 「フランス語の possible, probable, certain の意味と構文」, 『人文論究』 46–1, pp. 138–149.
- (1998): 「『思い描く』を表わすフランス語の *se* + 動詞」, 『年報・フランス研究』 32, pp. 55–67.
- (1999): 「*se douter* の働き」, 『人文論究』 49–1, pp. 21–33.
- (2000 a): 「*douter, imaginer* の否定文発話」, 『人文論究』 50–1, pp. 32–43.
- (2000 b): 「動詞 *intéresser* の働き」, 『関西学院創立 110 周年文学部記念論文集』, pp. 209–221.
- TASMOWSKI, L. et al. (1994): "*PouvoirE*: un marqueur d'évidentialité", *Langue Française* 102, pp. 41–55.
- VET, C. (1997): *Modalités grammaticalisées et non grammaticalisées, Les formes du sens*, Duculot, pp. 405–411.

文学部教授